

\*「ポレーシェ」とは チェルノブイリ付近の湖沼低地帯をいう



チェルノブイリ 24 周年救援企画 in 名古屋

「被曝した子ども達の願いに応えるために」講演会開催

於：名古屋 YWCA ビッグスペース

「エネルギーはすごく大事です。今は変わり目、変えるのは私達。エネルギーの背後には、原発だけでなく、環境破壊とか、搾取の構造とか、戦争の火種とか、儲ける人だけ儲かっていく利権構造がある。だから奪い合う。そうではなく、使ってもなくならない、地域でも手に入る、環境を破壊しない、安価で安心なエネルギーは、ちゃんとあります。Good-bye 原発！ Lets エネルギーシフト！と声に出していきましょう」と、明るい鎌仲さんの声が、会場に響きわたった。

チェルノブイリ原発事故が起きた時、日本に降り注いだ放射能の計測値は、セシウム<sup>137</sup>に換算すると100倍を示していたにもかかわらず、それを無視、隠蔽し、その危険と対応を公表せず、何の影響もなかったかのように今日に至っている。これは、原発を温存、推進するために必要だったからだ。にっちもさっちもいかに壊れたウラン濃縮装置をかかえ、同じく、高レベル廃棄物をガラス固化できないで、これまたにっちもさっちもいなくなった欠陥だらけの「六ヶ所村再処理工場」は、すでに、放射能で環境を汚染し、例えば、近くのおぶち沼のプランクトンから83倍ものヨウ素<sup>129</sup>が検出され、人々の食事は30倍、海も6倍の値が検出され、汚染が進んでいる。また、「夢の増殖炉」ではなく、「危険の増殖炉」であることが明白となった「もんじゅ」の惨状。それらを是とし、これから11基もの原発を作ろうとする日本のエネルギー政策の愚かしさ。その現状に甘んじて思考停止状態になっている人々の、「原発は必要」という刷り込みの根深さ。

しかし一方で、美しく生物多様な田ノ浦を望む山口県上関町「祝島」で、上関原発建設反対運動を28年間やっている人々や若者達がいる。「建設を阻止することは難しいかもしれないが、世論が新しい再生可能なエネルギーを選択するまで、原発を作らせることを引き延ばしたい」という祝島の住民の声に応えるために、現状のエネルギー政策から脱却し、安全で心地よい再生可能エネルギーへの転換を急がねばならない。(山盛)



<鎌仲ひとみさん、熱く語る!! >

「チェルノブイリ救援 25 周年企画 in 名古屋」実行委員大募集！来年のチェルノブイリ 25 周年企画と一緒に考えてくださる方、募集中。連絡先は TEL/FAX 059-229-3078 (宮西)

〒466-0822 名古屋市昭和区楽園町 137 1-10  
**チェルノブイリ救援・中部** 代表：小牧 崇  
 銀行 名：三菱東京UFJ銀行 名古屋営業部 (店番号 150)  
 □ 座 番 号：普通 6949211  
 □ 座 名 義：特定非営利活動法人チェルノブイリ救援中部 理事長 小牧 崇  
 郵便 振 替：00880-7-108610  
 TEL / Fax：052-836-1073 (月・水・金 10:00 ~ 17:00)  
 ホームページ：http://www.chernobyl-chubu-jp.org

**6月27日(日)に  
事務所移転します。  
(詳細は p12 をご覧ください。)**

## 6月19日(土) 2010年度の総会を開催します！ (内容の一部を紹介します。)

### 2009 年度活動報告 (時系列)

春…恒例のチェルノブイリ・デーは、「名古屋働く人の家」を会場として、BDF 精製の実演・講演・カード作りなど盛りだくさんの内容で、終日人を集めることができた。現地ラスキ村では、4月下旬から6月上旬にかけて、原さんを中心に BG 製造装置の建設。製材からコンクリートブロックもすべて手作りという困難を乗り越え、最大4名の日本人スタッフが張り付いて、地下に埋設する主要部分が完成。

夏…ウクライナより、ディードゥフ夫妻来日。伊那・京都・大阪・名古屋の4会場で、講演会を開催する。各地で、活発な意見交換と交流が行われた。

秋…8月下旬、9月上旬・中旬と相継いで訪う。それぞれ、現地調査や BG 装置の仕上げ作業に従事した。(戸村さんは、3月上旬までゼムリヤキにて長期研修。)国内では、秋の各種イベントに参加。名古屋 NGO センターからの研修生(小島君)を中心に、カード・ミルクキャンペーンの取り組みも活発であった。

冬…2月、現地パートナーとの意見交換を主目的として、代表団訪う。

振り返れば、休むことなく活動し、日・ウ間の往来も頻繁な一年だった。これは、一方で財政難の原因にも。秋より、財政再建委員会を立ち上げ、各種助成金への積極的応募、賛助会員の募集、これと連動しながら、ホームページのリニューアルなど、組織の財政基盤や広報体制の確立にも、本格的に取り組んだ。

### 2010 年度活動計画

5年計画で2007年に着手した「菜の花プロジェクト」も、4年目を迎えました。すでに、BDF・BG 製造装置など、ハード面の整備は一応済みでしたので、今年度は、これらのプラントの本格運転と、ソフト面を含めたプロジェクトの完成を目指します。(小牧)

## 総会 & チェル救デーのごあんない

日時 ● 6月19日(土) 13:30~16:30

会場 ● 『あいち国際プラザ』交流室 :大

住所:名古屋市中区三の丸二丁目6-1 愛知県三の丸庁舎内

アクセス:地下鉄名城線「市役所駅」下車⑤出口 西へ徒歩5分

:地下に駐車場(無料)があります。

時間 ● 13:30~14:30 2010 年度定期総会

14:45~15:30 戸村京子さんのウクライナ研修報告会

現地 DVD 上映会(変更の可能性があります)

15:30~16:30 交流会

「菜の花プロジェクト」も4年目に入り、支援者のみなさまにご報告する内容も、より具体的なものになってきました。ポレーシェの有料化等、財政難とも必死に闘っています。私達の活動報告をぜひ聞いていただき、ご理解につなげていただけたらと思っています。ぜひお越しください。(市原)

<財政再建委員会からのご報告>

## たくさんのご支援で、新年度を迎えました。 (神谷)

皆様方からのたくさんのご支援と、民間助成金のおかげで、「菜の花プロジェクト」4年目と医薬品等支援の新たな活動が始まりました。4月末迄の現況を報告させていただきます。

### ①「賛助会員」を紹介してください。

- ・3月末、「ポーシェ」購読者の約50%の方を、「賛助会員」(年度内に3,000円以上の寄付金をいただいた方)として登録させていただきました。
- ・5月の運営委員会で協議の結果、購読者の縮小再生産をできるかぎり避けるため、「賛助会員」の皆様と、過去2年間に寄付金をいただいた方に、再度「賛助会員」への加入を呼びかけながら送付させていただくことを決定しました。同時に、新たな購読者増大に向けて、皆様からの購読者紹介をお願いします。キャンペーン等については、次号でお知らせします。



<殺虫剤噴霧の準備をするディードゥフさん>

### ②「菜の花プロジェクト・一坪キャンペーン」の募集

- ・3月末現在、59名(109口)の応募をいただきました。5月中旬、バイオガスの追加工事のため当法人スタッフが訪うし、その際「菜の花畑」に、応募者の県名・苗字の看板表示を行う予定でしたが、急病にて6月中旬以降に延期となりました。改めて、ご報告させていただきます。

### ③「官民の助成金申請」の現状

- ・今年度の活動のため、8団体へ申請をし、採用は「(財)日本国際協力システム」「NPO法人アルシュ」「東海地域NGO活動助成金」「三井物産環境基金」となりました。3団体が不採用、1団体は、他の申請と重複するため、辞退しました。助成金総額は577万円です。

### ④3-4月 寄付金のご報告

- ・3月の寄付金は、196,800円(38件)、4月の寄付金は539,660円(87件)でした。皆様のご支援に、心から感謝いたします。

## 「春の討論集会」で、チェルノブイリ報告 (原 富男)

3月27日、東京で子供問題研究会主催による「第35回春の討論集会」が行われました。子供問題研究会は72年に発足し、75年から「春の討論集会」は行われ、「(勉強ができて、できなくても)一緒に地域の普通学級へ」の願いを主張し、語る場として(主に「障害児」を取り巻く問題をテーマに)毎年開催されてきました。このような場所で、「チェルノブイリと僕のかかわり」を語るように依頼され、場違いなのではないかと困惑しましたが、僕の10代からの友人である戸恒和夫さんからの誘いを「断りきれず」参加しました。今回の「春の討論集会」では、主に以下の3つのテーマについて話し合われました。

①中村哲氏らのアフガンでの活動を紹介したDVD「アフガンに命の水を—ペシャワール会26年の闘い」の上映

②原の「チェルノブイリとのかかわり」

③戸恒香苗さんの、「『障害児』と診断されて分けられることを拒否し、地域の学校へ」と考える親子に付き合った「30年間の相談業務」の報告

ペシャワール会のDVDは、中村哲氏らが医療を続ける中で、病気の根本的な原因が「貧しさ」であり、作物を作り育てる水の確保をすることが、大量の餓死や流民を防ぐことになることに気付き、「聴診器」を「鍬」に持ち替え、24kmにも及ぶ農業用水路を、土木の素人が完成させたドキュメントでした。水路の完成で、60万人の農民の生活を可能にした映像は、実に感動的で示唆に富む物でした。

僕は、チェルノブイリ救援の始まりから「菜の花プロジェクト」まで話し、他の「報告会」では話さない、現地での「失敗談」や「裏事情」、抱えている困難なども話しました。他の団体の働きを通して自分達の活動を見ることは、良い刺激となりました。「医療から農業用水路」に至ったペシャワール会と、「緊急援助から菜の花プロジェクト」に至ったチェル救は、「実情に合わせ自らを変える」という点で似ていると感じました。(字数の関係で、戸恒さん報告を紹介できません。ごめんなさい。)

## 「日本学術振興会 科学研究費補助金事業」で、ナロジチ地区の調査を行います。

(独) 労働安全衛生総合研究所 人間工学・リスク管理研究グループ 木村 真三

京都大学原子炉実験所の今中哲二さんの厚意により、一昨年から「日本学術振興会 科学研究費補助金事業」、いわゆる「科研費」の調査メンバーに加えていただきました。今回の調査では、ジャーナリストの七沢 潔さんの取材に同行する形で、チェルノブイリ原発の元運転員や元核安全課副主任といった方々の話を聞くことができました。その中で、ハザール村での調査を紹介いたします。

ハザール村は人口526人の長閑な農村でしたが、第2ゾーンに指定されている地域でした。ウクライナの経済が疲弊し、国からの援助自体が困難になったため、現在、第3ゾーンに移行させるか否かを検討している状況でした。現場での聞き取り調査から、すぐ近くに住居がある3世代が暮らしている家族の中に、年齢25歳の主婦で、1歳になる子どもとおなかの中に10ヶ月の赤ちゃんを身ごもっている方に、甲状腺腫瘍があることを確認しました。さらに、21歳になるその女性の弟にも甲状腺異常との診断が出ていたことも確認しました。この家族は、10年も前から移住申請を出しているのですが、「あなたの請願書は検討され、ブルシロフ地区のモロスィフカ村で建設計画があり、建物は99年9月1日に完成する予定です」と書いた文書と、「予算が限定されていることから、2000年には25軒のうち4軒をブルシロフ地区のマリニフカ



＜春播きナタネ畑で(今中・川野さん)＞

村に作る予定です。移住希望に鑑みて、移住先を保障する」と書いた文書が送られてきただけで、結果は何もなく手紙だけだったということです。

この経験から、何とかナロジチの人々を支援したいと思い、「科研費」を申請しました。今年から3年間、健康調査を中心に開始します。メンバーは、すべて私の友人たちでまとめた、医師・衛生学者・物理学者・化学者とジャーナリストからなっています。もちろん、救援・中部さんとは協力関係を結びました。どこまで支援できるかやってみなければわかりませんが、「乞うご期待!」というところでしょうか。

## 笠寺観音フイマ体験記 (新里 義秋)

2010年4月18日(日)の早朝8時より、名古屋市南区笠寺町にある笠寺観音にて、フリーマーケットが開催され、私は、チェルノブイリ救援・中部のスタッフの方々や、私の行きつけの居酒屋で知り合った飲み仲間と、参加しました。事前に出店方法等を調査しましたが、私自身の段取り不足もあって、出店時1ブースに車両1台配置しなければならない条件があるにも拘わらず、前日まで車両の確保ができず、また、出店する品々もあまり集まらない状況下で出店に臨みました。

フリーマーケットの開催時間は、朝9時から昼3時までですが、お寺での開催とあって年配の方が非常に多く、開催時間になっていないにも拘わらず、陳列している商品を見ては値段交渉してくる人や、商品を購入する人もおり、フリーマーケットに来られた人達の熱狂ぶりに圧倒される事もありました。中でも食器類が人気で、陳列後直ぐに売れる大盛況ぶりで、食器類は即完売となりました。

私自身も欲しい品々があり、状況を見ながら他のブースを散策しましたが、どのブースも大盛況で、鍋やフライパン等食器類を全部新品で売っているブースもあれば、ガラクタ同然の物、普通では手に入らないレア物も見られました。他では、派手な衣装に着替えた年配の女性が歌を歌いながら客寄せをする姿も見え、私自身、昭和初期を体験した事はありませんが、美空ひばりの歌が周りに響き渡り、ゆっくりと過ぎていく時間に昭和初期を感じました。再び私達のブースへ戻ると、名古屋市長の河村氏もフリーマーケットに駆けつけ、各ブースへ励ましの声を掛けていましたが、人気がある市長とあって、市長の周りには若者から年配の人が集まり、写真を撮る姿が多々見られ、人気ぶりに驚かされました。

今後も、この様なフリーマーケットへ積極的に参加しようと思っておりますが、出店に関しての情報収集や事前準備を整えた上で出店に臨み、成功させていきたいと思います。

## 「ゼムリヤキ取材一ヶ月」 (宮腰 吉郎)

ナロジチ再生・菜の花プロジェクトの映画制作中の宮腰です。現在、ウクライナ滞在中ですが、今回はプロジェクト取材ではなく、宇部市「えんどうまめ」の石川悦子さんの依頼で、プリピャチからの移住者の互助団体「ゼムリヤキ(同郷人)」についてのDVDを制作することになり、その活動を取材中です。

ゼムリヤキについては、すでに戸村さんが昨秋から冬にかけての研修時の様子を報告されていますが、ここでは、ゼムリヤキの春の活動に付き添う中で、私なりに感じたことを報告します。――

ゼムリヤキに滞在してまず感じるのは、「雰囲気が良い」ということで、これは代表のタマーラ・クラシツカヤさんをはじめ、主要スタッフの皆さんの「つらい出来事が多い中、自分たちが率先して明るく生きる姿勢を示す」という活動方針が反映されている。しかし、実際ここに滞在していると、つらい出来事に遭遇する機会は多い。ゼムリヤキでは様々なイベントが行われていて、日々の語学教室や幼児サークルの他、夫亡人の集い「クラブ・ゼムリヤチカ」、障害児のための「チェルノブイリの犠牲者の子ども達」、被災者の中でもとりわけ重い障害や病気などで困難を抱える人々を支援する「SOSプログラム」などがある。SOSプログラムでスタッフが家庭訪問するのに同行したときのこと、スタッフに日頃の困難な生活状況を涙を流しながら語る被災者に何人も会い、結核・喘息を患い、歩行障害を持ちながら、一般住宅で一人暮らしをしている方もいて、彼らの置かれている困難な状況を肌で感じた。

主要スタッフでも、この1ヶ月の滞在中に、会計を担当されていた方が体調を崩されて交替され、また、別のスタッフは認知症の老親が倒れ、寝たきりとなったため、自宅介護をせざるを得なくなり、事務所に出てこれられない状態が続いている。その方とは同じ棟に住んでいるが、この原稿を書いている途中に私のステイ先に来られ、「同じ階に住んでいる30歳の男性がガンで亡くなり、母親が一人残され、葬式代も出せない」というので、お金を集めに来られたということもあった。

現在の被災者の喫緊の課題は薬の入手で、このところ、薬の価格が上がっていて、しかし、薬は飲み続けなくてはならず、ただでさえ大変な日々の暮らしを圧迫している。ゼムリヤキの財政状況も、日本からの支援なしには成り立たない状況にある。プリピャチへの郷愁は非常に強く、この若い労働者の街がいかに誇りであったか、ということが折々の会話から伺える。問題を抱え、結果として崩壊した実験国家ソ連であるが、彼らの話からは楽しく充実した日々を送っていたとしか思えず、また、無料の医療や様々な文化活動など、ソ連の様々な点を誇りとしていたことがわかる。ただ、事故直後「あなたもコミュニストなんだから、社会のためにここに残って仕事をするのが当然だろう」と言われ、本心では残りたくはなかったが、残らざるを得ず、様々な病気に苦しめられ続けている、という述懐もあり、彼らの心中も単純ではない、と推察された。

原発については、ウクライナの財政状況がよくないことも手伝って、「代替手段がないうちは、これに頼らざるを得ない」という、消極的賛成派とでもいべき人が多い。「チェルノブイリ原発も廃炉にすべきではなかった」という元技師の話も聞いた。しかし、「人類は、核の技術を扱えるほどには成熟していない」という考えで反対を表明する人もいて、様々な意見がある。――

このDVDは、『菜の花PJの映画』よりも先にできてしまいそうなのですが、完成したらポレーシエ誌上でご報告させていただきます。ちなみに現在(2010.5.31)、ゼムリヤキ・ウェブサイト(<http://zemlyaki.kiev.ua/>)の開設準備中で、今、内容を詰めているところです。最初はロシア語のみとなりますが、将来的には日本語他、各国語のページも作成することを目指しています。



◀ゼムリヤキのスタッフ(前列中央:宮腰さん、右端:代表のタマーラ・クラシツカヤさん)▶



<着物姿が山根さん(25番学校玄関まで)>

### 急がれる代替の新エネルギー開発と事業実施

(山根 田鶴子)

5月16日セントレア出発、過密スケジュール(下記の日程表参照)をこなして22日無事帰国。

事故が起きたのは今から24年前の事でしたが、4号機の石棺の老朽化に伴い、新たにその周囲をガードする計画は、予算不足で実行されずにいます。一度の事故で5万人の町が一夜にして廃墟になり、未だに汚染地区のナロジチ地区に住まなければならない1万人の人々、多くの被災者達が甲状腺、がんなどの病気で苦しみ、次世代にも影響を及ぼすこの事

態を、人類の教訓としてもっと重く受け止めなければならないと思います。事故から24年後の実態をみて、改めて原発事故の恐ろしさが身にしみました。代替新エネルギー開発と事業実施は、人類の幸福の為に国策として急務であることを知る為にも、多くの政治家に現地を訪問してもらいたいと思います。

車で走りながら、果てしなく続く広大な汚染地域をみて、かつては肥沃な土壌だっただろうと思うと、一度の原発事故の考えられない程の余りにも大きな負の遺産に愕然としました。人類は最悪を想定して、最も負担が少ない道を選ばなければならない時代にすでに来ていると思います。ジトーミル市副市長、議会訪問、被災者との面談など多くの皆様との出会い、私達に同行してくれたドンチェヴァさん、通訳の竹内さん、五代さんに感謝するとともに、24年間のチェルノブイリ救援・中部の支援活動に頭が下がります。「菜の花プロジェクト」の説明で、地区の責任者が「ドイツの企業は広大な土地利用で儲けを考えるが、チェルノブイリ救援・中部は、汚染地区が今よりよくなることを考えてくれる」と言った事が心に残りました。これから現地の学校との交流や、「菜の花プロジェクト」を支援していきたいと思います。

日付	日程
5月16日(日)	中部国際空港からヘルシンキ経由でウクライナ・ボリスポリ空港へ
5月17日(月)	9:00 出発。チェルノブイリ原発・旧プリピャチ市を視察。18:00 ホテルに帰着。19:30 に消防局の車でジトーミルに夜半に到着。
5月18日(火)	ジトーミル市からナロジチへ。ナロジチ地区行政で挨拶の後、「ナタネプロ」関係・病院・町学校・幼稚園を訪問(幼稚園では、草の根支援による設備を視察)
5月19日(水)	10:00~11:00 市庁舎での会見後、ホステージ基金事務所に移動。13:25 25番学校訪問後、消防局に移動し「チェルノブイリの消防士たち」との会見。
5月20日(木)	ジトーミルからキエフに向かい、チェルノブイリ博物館などを見学。
5月21日(金)	ボリスポリ空港からヘルシンキを経由し、帰路に就く(機中泊)。
5月22日(土)	朝、中部国際空港着。

### チェルノブイリ原発事故現場に立つ (栗田 裕之)

24年前に発生したチェルノブイリの原発事故は、世界中を震撼させました。この事故により、原子炉内にあった大量の放射能が大気中に放出され、それらが風にのり、世界各地へ飛んでいきました。約8,000Kの距離にある日本でも、当時微量ではあるけれども放射能が検出されたことを記憶しています。「24年経過した現場は、現在どのようになっているのだろうか?」、「発電所は一体どの位置にあるのだろうか?」という素朴な疑問を持ちながら、発電所視察の誘いがありましたので、よし行こうと迷うことなくウクライナ行きを決めました。「事故後の人体への影響はどうか?」、「時間の経過とともにどの

ようになっていったのか?」「行政の対応や住民の行動はどのようなものであったか?」など、私なりのたくさんの疑問ができました。特に、「24年間でどのくらい病気が軽減され元にもどりつつあるのか、それとも何ら措置が充分でなかった結果、未だにその解決策を模索している状態なのか?」とか興味深いものでした。というのは、広島・長崎の被爆者の病気回復率より、被爆者やその家族に及ぼす病気発生率の方が増加し、さまざまなガンにおかされ患者が広がった現状がわが国にあるわけで、現在でも体調異常に苦しむ方々が大勢いるという事実を私は知っているからです。この発電所事故の規模を聞くと、事故当時の対応のずさんさや、被曝汚染に対する知識不足や、事故直後の処置のあり方など、多くの不安材料ばかり知らされ、健康被害の実態については、おそらく想像を絶する数字が提示されるものと覚悟しながらの現場視察となりました。今後は、現状を正しく理解し、我々にできる支援や活動の場を自分なりに広げていくことと、責任をもった行動をとっていくことが大事であると感じました。最後に、竹内さんやドンチェヴァさんなどに、心より感謝申し上げます。



<チェルノブイリ原発4号炉の  
前に立つ栗田さん>

## 衝撃の瞬間 (三浦 雅司)

正確には瞬間ではない。楓や楡の木の、目が痛くなるような鮮やかな新緑。カッコウの爽やかな鳴き声、初めて見る水平な地平線、まさにウクライナ国旗の空の青とヒマワリの黄色、それを彷彿とさせる美しい風景の中、あのチェルノブイリ原発の石棺と呼ばれる4号炉さえ見ていなければ、楽しいピクニックの一時と錯覚しそうなその刻、俄かにかき曇った空から、雷鳴が轟き大粒の雨が廃墟となったプリピャチの町のホテルや観覧車、それに私達を襲った。

変な事を言うようだが、私は大変天気には恵まれていて、市役所の職員と時に登山をするのだが、いつも快晴で、三浦と山に登ると天気が良くて本当に嬉しいと喜ばれており、天気だけは大袈裟だが神様がついていてくれるのかも知れないと思っている私に、恥ずかしいけれど神様が何かを伝えたいのかと思ってしまうような、瞬間ではない一刻が私を包んだ。

実を言うと、日本人である私は広島・長崎もそれなりに知っているし、チェルノブイリもニュースである程度の知識は持っていた。しかしこのような事件は有っても、我儘な人類は、特に日本人は、殆どの人が寝静まった真夜中にもコンビニを営業させている。ランドサットから見た日本は、自動販売機の熱で赤く写るそうだが、そのエネルギーを供給するのに、少なくとも太陽熱や風力などが安定して利用できるようになるまでは「やむを得ない必要悪だろう」程度の、割と軽い気持ちでウクライナを訪れたと言うのが本音であった。しかし「石棺」を目の当たりにし、今も残務処理をする人々と会い、60~



<左から三浦さん、通訳の竹内さん、山根さん、  
栗田さん(プリピャチにて)>

80万人居る原発事故後の消火作業に従事した消防士も含め、放射能の除去作業に携わり「リクビダートル(事故処理作業者)」と呼ばれる方々や、また市長・市議員・医療関係者・被曝者・その2代目等々の人々と接して、「本当にそんな事で良いのか」と強く考えさせられた。

「チェルノブイリの人質」基金代表で、自身も被曝者でそして私と同じ1940年生まれのキリチャンスキーさんの言葉は、本当に重みが有り、「原発は頭から絶対反対、ではない」と。いま地球上で一番大事なことは、「もっともっと」とこれ以上の贅沢を求める日本人や、先進諸国の人間を戒める「教育」から始まるのではないだろうか。

ナトリウム火災で14年間停止していた「高速増殖炉・もんじゅ」が運転再開した。運転再開と同時にトラブル続きだが、ここで問題にするのは、そもそも「もんじゅ」という「高速増殖炉」の本質的な価値について、である。世界が断念した「高速増殖炉」と、それとセットの「核燃料サイクル」は、何故日本で生き残り続けるのか。政治家や原子力関係者、地元自治体が期待する「未来のエネルギー」は確保できるのか。答は「ノー」である。それは何故か。

### ● 「高速増殖炉」の名前の由来

恐らく多くの日本人は「高速増殖炉」のネーミングに、期待を込めて「危険だが高速でプルトニウム燃料を増殖する原子炉」だと思ってはいないだろうか。この名前を付けた科学者が誰かは知らないが、かなりの知恵者でかつ悪賢い人物である。何故なら「高速」の意味は核燃料の増殖速度ではなく、通常の軽水炉原発が、核分裂で発生した「高速中性子」を原子炉中の水（軽水）で減速させて「低速中性子」にしてからウラン<sup>235</sup>に衝突させ燃やすのに対し、「もんじゅ」は中性子を減速させないナトリウムを冷却材に使い、「高速中性子」のまま核分裂を起こさせるので「高速」という名前を使っているに過ぎないからである。一方、高速中性子は、核燃料中の本来「燃えないウラン<sup>238</sup>」に吸収され「燃えるプルトニウム<sup>239</sup>」に変わる、とされている。それが燃料「増殖」の名前の由来である。そもそも全く無関係な二つの名前を連結したところに、この新型原子炉のまやかしのルーツがある。

### ● 核燃料は「増殖」するのか？

燃えない「ウラン<sup>238</sup>」が燃える「プルトニウム<sup>239</sup>」に変るのであるから、科学的には燃料が増殖する、と言える。しかし、それが実用性に結びつくか否か、といえ答は「ノー」である。「もんじゅ」の中で新たに出来た「プルトニウム<sup>239</sup>」は、一定時間後に再処理工場で取り出し、新たに「もんじゅ」の燃料を作らなければならない。即ち、増殖した核燃料を実際に次の核燃料として使うには、「現在燃えている燃料」に加えて、「再処理と加工中の燃料」が同時に存在する必要がある。新燃料に点火してから増殖した燃料が使えるまでに要する時間を、「倍增時間」という。「倍增時間」が例えば1年程度なら、「もんじゅ」は継続して運転可能であ

る。ところが「もんじゅ」の場合、この「倍增時間」は約90年である。皆さん「エッ！」と思わないだろうか。このことは、独立行政法人日本原子力開発機構（前、動力炉核燃料開発事業団）のかつての理事長も、NHKの公開討論で認めている。中部電力の株主総会でこの点を追及された浜岡原発所長（取締役）は、「確かにそうだが、もんじゅを90基作れば1基分の燃料を確保できる」と答弁して会場の失笑をかったことがある。原子力の専門家なら、この「倍增時間」の矛盾は誰でも知っているはずである。にもかかわらず、彼らは相変わらず「夢の原子炉」という幻想を振りまいて、予算獲得に奔走している。無知な政治家とマスコミもそれを追及しないばかりか、地球温暖化対策に役に立つ、とはしゃいでいる。これは、まさに知の退廃ではないだろうか。

### ● 海外の高速増殖炉では・・・

「核燃料倍增時間」は計算できる。計算式は公開されている。各国の高速増殖炉のパラメーターを使い、筆者が計算した結果は以下のとおりである。原型炉「もんじゅ」は95年。実験炉「常陽」は300年、ロシアの「BN600」は130年、ドイツの「カルカー」の設計値は95年だが、運転してみると実際はプルトニウム減少、もんじゅより先を行ったはずのフランスの実証炉「スーパーフェニックス」は、設計値は無限時間、運転してみると燃料が増殖どころか減少するので、軽水炉でできたプルトニウムの「焼却炉」にしたら良い、というアイデアまで出ている。このように、世界に「実用的に燃料が増殖する高速増殖炉」は存在しない。「夢の原子炉」は、やはり「夢」でしかない。これが、世界が高速増殖炉から撤退した真の理由である。それでもあなたは「もんじゅ」に期待しますか。 (河田)

## 被災者3団体・健康保険組合(民間)利用に関する「アンケート調査」報告

昨年未から準備し10年1～2月に実施した、被災者3団体(慈善基金「チェルノブイリの消防士たち」、「チェルノブイリ障害者基金」ジトーミル市・州支部、ジトーミル市・州チェルノブイリ障害者慈善基金「リクビダートル基金」)のアンケートを集計しました。

以下は、団体向け(27項目)・会員個人向け(18項目)のアンケート結果を合わせた一部です。

「健康保険組合」の利用の実態や問題点、被災者団体の考え方などが明らかになりました。

### 【被災者団体アンケート回答・基本情報】(団体名は略称)

団体名	会員数	回答数	多い年齢	障害の等級
「消防士基金」	202名	21(男女不記入)	50才前後	1級障害者が多い
「障害者基金」	96名	16(男10・女6)	65才～75才	2級障害者が多い
「リクビダートル」	131名	126(男106・女20)	75～56才	2・3級障害者が多い

### 「健康保険組合」の利用について(08年度)

団体名	加入・非加入	非加入の主な理由	利用回数	保険利用の問題点
「消防士基金」	全員非加入	提供医薬品のリストに必要な薬がない、高価な薬が提供されない	記載なし	効果のある高い医薬品の提供が得られない
「障害者基金」	加入－6名 非加入－10名	医薬品の提供が充分でない、正当に機能していない	0回－1名 1回－3名 2回－2名	効果的な治療に必要な薬が提供されない
「リクビダートル」	加入－21名 非加入－105名	治療システムが不完全である	1回－10名 2回－10名 3回－1名	民間保険組合の薬では効果の上がる治療が得られない

### (08年度「健康保険」適用外で)「救援・中部」の支援を利用した人について

団体名	回数・人数	最も多い一回の費用(1G≒12円)	使った医薬品の多いもの
「消防士基金」	1回－31名 2回－4名	600G(グリブナ) 以上－16名	①高血圧治療薬 ②心臓血管系疾患治療薬 ③胃腸疾患治療薬 ④肝疾患治療薬 ⑤骨組織疾患治療薬
「障害者基金」	1回－70名	100～300G －61名	①抗がん剤 ②高血圧治療薬 ③心臓血管系疾患治療薬
「リクビダートル」	1回－128名 2回－14名	100～300G －104名	①抗がん剤 ②心臓血管系疾患治療薬 ③神経疾患治療薬 ④消化器系疾患治療薬 ⑤糖尿病治療薬等

アンケート実施期間が厳冬期で、団体によっては回答の回収に困難があったため、回答数が大きく異なり、数字のみで比較はできませんが、[保険に非加入の理由・問題点]で明らかのように、民間健康保険組合の実態は被災者にとり有益ではないことがわかり、今後さらに評価検討し、被災者団体支援がより有効なものになるよう考えていきます。

(戸村 京子)

## 竹内さんのウクライナ便り

4月から5月、リンゴの花やカシタン（西洋トチノキ）の花、ライラックの時期が過ぎて、いつもならさわやかな気候の季節なのですが、なぜかこのところ雨がちで気温も低めの日が続いていました。本紙でも紹介されている静岡市議の方々のウクライナ訪問に際し、私も通訳を務めさせていただき、チェルノブイリ原発にも5月17日に行ってきたのですが、我々の乗ったマイクロバスの運転手氏によれば、来ウ中のロシア大統領メドヴェージェフ氏も、翌日同原発を視察する予定だとのことでした。しかし、その後の報道を見ると、この予定はキャンセルされたようです。17日には、ウ露両国の大統領が無名戦士の墓を訪れた際、モミの木の飾り物が風にあおられてヤヌコーヴィチ大統領を直撃、怪我はなかったものの、いささか見苦しい様子を衆目に晒してしまうというハプニングがありました。ところが、大統領の報道担当官が、くだんの場면을撮影していたTV局のカメラマンたちから録画データを押収しようとし、またTVでの放映を禁止しようとした由。幸いにしていくつかのTV局はこの圧力に屈せず、問題の場面が放映されたほか、YouTubeでも百万人近くがこの情景を「鑑賞」した…と、21日付の某週刊誌には書かれています。

しかし、現政権のマスコミに対する圧力はこれに限られたことではなく、5月6日にはTV局「1+1」の11名の記者及び4名のキャスターが、次のような検閲に対する抗議の声明を発表しています。「私たちは特定のテーマや出来事をカヴァーすることを禁じられています。現政権に対し批判的なストーリーは、政治的な理由によって放映されません。私たちの制作するニュース番組の放映に関する最終的な決定は、番組のチーフ・エディターでなく、『1+1』社長によってなされています。…私たちは野党の擁護者だったり、そのシンパだったり、同調者だったりするわけではありません。ジャーナリストは自らの政治的志向を番組に表さないものです。しかし、関係者各人が、自分の立場を平等に視聴者に伝える権利を持っていると私たちは考えます。…私たちにとって言論



<友人と訪問したウクライナ南西部の  
フメリニツキー市郊外にて(5/2)>

の自由とは、ただの空疎な言葉でなく、職務の根本をなすものです。正にそのために、私たちは言論の自由に対する圧力に断固として反対します。…検閲の圧力に晒されているのが自分たちだけではないことを、私たちは知っています。今、この第一歩を踏み出すことが、いかに困難であるかを私たちは知っています。2004年〔の大統領選で不正が行われた際〕、私たちは自らの内に力を見出し、恐怖を克服しました。…そして私たちは検閲に対し『否』の意思表示をしました。私たちは職、同国人の信頼、私たちめいめいが住みたいと思い、自分たちの子ども達が住むであろう国を失う危険を冒しています。同業者の皆さん！団結し、ともに私たちの職業の名誉を守ることを呼びかけます！」

この声明は、2000年に首なし死体で発見されたゴンガゼ記者の創設したニュース・サイト「ウクライナの真実」に掲載されましたが、その後5月21日付で、同サイトの記者は「事件の10年後、私たちは未だに彼の死の真のいきさつを探り続けている。公式の説明は今日に至るまで存在しない。罰を受けたのは下手人のみで、殺人の指令を出した人物とそのお膳立てをした人物は、捜査の結果名指されていないからだ。…TV局の重役とオーナーは、ある種のテーマは取り上げるに値しない、なぜならビジネスそのものと局員たちに危険を及ぼすことになるからだ、と今もなおジャーナリストたちに言い続けている」と書いています。

(5月23日)

特定非営利活動法人 チェルノブイリ救援・中部  
2009年度収支報告書

(自2009. 4/1～至2010. 3/31)

収入の部			支出の部			
項 目		金額(円)	項 目		金額(円)	
寄付金		15,968,841	事業費		16,404,671	
個人	一般	1,823,618	医療機関支援事業費		854,931	
	ミルク	698,400	医療機器提供事業		547,173	
	被災者	35,000	医薬品提供事業		307,758	
	維持会員費	292,000	保健事業費		629,958	
	菜の花プロジェクト	11,459,783	粉ミルク提供事業		629,958	
	賛助会員	411,000	被災者団体等支援事業		1,113,889	
	一坪キャパシティ	346,000	ウクライナ農地改善事業		7,656,519	
	その他	303,040	自己資金		5,436,233	
団体	一般	600,000	ボランティア貯金助成金		2,220,286	
補助金・助成金		8,176,403	ボランティア貯金助成金返還金		1,603,714	
	ボランティア貯金助成金	3,824,000	NGO長期支援プロジェクト事業		2,054,371	
	民間団体助成金	1,324,000	職員研修費		2,054,371	
	地方公共団体助成金	0	業務委託費		393,788	
	NGO長期支援プロジェクト	3,028,403	駐在員費		405,963	
雑収入		173,191	交通・別荘カード事業費		102,503	
受取利息		5,171	通信誌発行		903,730	
/				代外参加費		685,305
				管理費		2,621,925
				給料		1,173,500
				印刷製本費		0
				広告宣伝費		6,315
				旅費交通費		170,800
				会議費		19,000
				消耗品費		219,683
				通信費		190,396
				支払手数料		93,587
				諸謝金		0
				諸会費		48,000
				水道光熱費		19,764
				地代家賃		533,483
				租税公課		19,500
				雑費		121,339
		為替差損		6,558		
当期収入合計		24,323,606	当期支出合計		19,026,596	
			当期収支差額		5,297,010	
前期繰越収支差額		8,801,470	次期繰越収支差額		14,098,480	
収入総額		33,125,076	支出総額		33,125,076	

上記期間の収支報告書を監査した結果、異常なく正当に処理されていることを証明します。

平成 22年 4月 20日

監査人 神野 美知江

会計業務を日々重ねていくことで、団体にとって明確で、また日々の業務に最善の方法を編み出していくことができるようになりました。まだ多くの改善する余地があるので、今後も学んでいきたいと思っております。  
(山本梨恵)

## 事務局便り

1992年に事務所を構えてから18年目、移転することになった。ひとり事務所において、部屋を見回せば、雑然として置かれている書類や、壁かけられた絵や写真が、自分と一体化しているような錯覚にとらわれる。不思議なもので、自分の部屋より、いとおしさが湧く。語ろうとすると、こみ上げるものを抑えることができない。しかしまた、この年月の長さには複雑な思いが募る。チェルノブイリの終わらぬ災禍があるから続く、この活動…。

4月の講演会の実行委員との出会いは、私にとって目からうろこだった。今回の企画の反省会で、来年の「チェルノブイリ企画」の話が始まった。これほどまでに、「チェルノブイリ」と真摯に向かい合っている人たち。「チェルノブイリ」にとことんこだわる。私達のミッションは「風化」を食い止めること。そして、希望を見出すこと。今更ながら、改めて感じた。(山盛)

## 6月27日に事務所を移転します!!!

平成5年から17年間「楽園アパート」に事務所を構えて、「3人入ればすれ違いも譲り合い」の事務所維持を行ってきました。昨秋、愛知労働文化センターより、「空室があるので入居しないか?」の呼びかけをいただき、条件等の検討を重ねてきました。その結果、従来に比べ経費的に負担にならず、占有面積が増え会議等も行える広さを有し、交通の便も良いとの結論に達し、移転することにしました。

\*移転先住所 〒466-0064

名古屋市昭和区鶴舞三丁目8番10号 愛知労働文化センター 地下1階

\*TEL/FAX 052-836-1073 (変更なし)

\*移転日 2010年6月26日(土)

従来の事務所より、ゆっくりと机に座ってお話できると思います。お近くにお越しの際は、ぜひともお尋ねください。

## 編集後記

☆クレジットカードを新しく作ったら電子マネーのカードがもれなくついてきた。お財布に入れたまま操作できる便利さだけど、情報も漏れやすいんじゃないかと不安に思う。でも珍しさで使っちゃうんだよね~(佳)

☆ただ今、ジトミルやナロジチの子ども達に「クリスマスカードを手渡すツアー」を計画中です。名付けて「サンタクロースツアー!(オーロラも…)」一緒に出掛けませんか? 来年1月中頃に出発です。

詳細は、6月の総会会場でチラシをお渡しします。申し込みは、早いほうが良いですよ。(美)

☆どこか、身体の芯だか心の奥だかが疲れてしまったウクライナでの生活から、このごろようやくほぐれてきた。この風薫る季節、萌え出る生命に癒される。いよいよ新年度、チェル救他でもCOP10関係や企業との連携・CSRなどのテーマでスタート。(と)

☆旧自民政権時代に官房長官を務めた野中広務が、官房機密費を多数のマスコミ人(メディア幹部・評論家・コメンテーター・司会者・芸人等)にバラまいていた事を吐露した。国民の血税が、マスコミ人への賄賂に化け、うその情報を流されて、国民自身が洗脳され続けてきた訳である。来る7月11日(参院選)までに、一人でも多くの国民が、この巨悪に目覚めることを願うばかりである。(J)



### お宝ネット 発送先および連絡先

〒399-4511

上伊那郡南箕輪村南原 9955-2 原方  
「救援・中部 お宝ネット」宛

TEL 0265-73-9355

Fax 0265-73-9352

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14

印刷「エープリント」

TEL・FAX (052) 871-9473